

いわゆる「欲求のパラドックス The Paradox Of Desire」について

鈴木 真 (Makoto Suzuki)

名古屋大学大学院人文学研究科

自己嫌悪のために、私はみじめな状態になる **badly off** ことだけを欲するとしよう。私はみじめな状態にあるかないかのいずれかである。私がみじめな状態にあるとすれば、私の唯一の欲求は充足され、したがって欲求説によると、私はみじめではない。他方、私がみじめでないとすれば、私の唯一の欲求はくじかれ **frustrated**、私はみじめである。要するに、欲求充足説は、ある事例においては、ある人がみじめであるのはその人がみじめでない場合であり、その場合のみである、という矛盾する考えを含意するようにみえるのである。(Heathwood, 2016, p. 145)

福利の欲求充足説 **desire-fulfillment theory of well-being** は、最も有力な福利の理論の一つである。しかしこの説は、一定の欲求を当事者が持つ場合、矛盾を含意するようにみえる。この、いわゆる「欲求のパラドックス」が、ここ 20 年程注目を集めている。実のところ、この種のパラドックスは、様々なタイプの欲求充足説にとって問題となるだけでなく、他の、欲求以外の心的状態と現実の一致に福利の基礎を置く理論にとっても問題となる。(このように、「欲求のパラドックス」という名前はミスリーディングなのだが、この名前で知られており (Skow, 2009) 簡潔さという長所があるため、本発表ではこれを採用する。) 本発表の目的は、このパラドックスに対する既存の回答を紹介してその不満足な点を指摘したのちに、かなり単純な解決策を示して擁護することである。

冒頭の Heathwood からの引用は、いわゆる「欲求のパラドックス」の一例である。引用で想定されているタイプの福利の欲求充足説は、欲求の充足は当事者の福利を向上させるというだけでなく、欲求の挫折 **frustration** は当事者の福利を低下させる、という主張もする理論である。欲求の挫折は当事者にとって悪くはないとする欲求充足説も可能だが、そのような立場にとってもパラドックスは生じる。このような説においても、私が総合的にみてみじめな状態にあることだけを欲求し、実際私が総合的にみてみじめな状態にあるとしよう。すると、私の唯一の欲求が充足されるために私は総合的にみてみじめではないということになり、矛盾が生じるようにみえる。

また「主体 A は事態 S を欲求する」というような形で表現される欲求ではなくて、「主体 A は事態 S1 より事態 S2 を選好する」という形で表現される選好によって説を定式化し、選好の充足はその分だけ福利を向上させる、という立場 (選好充足説) を採る場合にもパラドックスは生じる。私が全体としてみじめな状態であることをみじめな状態でないことよりも選好し、これが唯一の選好であるとしよう。私が全体としてみじめな状態にあるとすれば、この唯一の選好は充足されているので、この説によると私は全体としてみじめな状態にはない。さらに、この選好充足説が、選好が挫折するときはその分だけ当事者がみじめになるという主張も含むものなら、私が全体としてみじめな

状態にないとするれば、上記の選好は充足されていないので私は全体としてみじめになる。こうして、選好充足説の形態を採っても、一定の事例では、ある人が全体としてみじめであるのはその人が全体としてみじめでない場合であり、その場合のみである、ということが成立してしまいそうである。

「欲求のパラドックス」に類似の問題は、欲求充足説だけでなく、心の状態と現実の一致に福利を依存させるタイプの多くの福利理論に生じる。このことを Bradley (2007, pp. 46-48)は、福利の目標実現説や知識説や Fred Feldman が提示している（彼が支持しているわけでは必ずしもない）「真理で調整された内在的態度快楽説 (Truth-Adjusted Intrinsic Attitudinal Hedonism, TAI AH)」について指摘している。たとえば、Feldman の内在的態度快楽説では、快楽や苦痛は命題的態度の一種だとされ、その福利への貢献はその態度の強度による。TAIAH では、この命題的態度が真である——この態度の内容が現実と一致している——場合には、その快楽は当事者の福利をより向上させ、その苦痛は当事者の福利をより下降させる (Feldman 2004: p. 112)。たとえば真なる快楽は同じ内容の偽の快楽の2倍当事者にとってよいとし、真なる苦痛は同じ内容の偽の苦痛の2倍当事者にとって悪いとしよう。ここで、誰かが自分が総合的に見てみじめな状態であることに態度的快楽をもち、その強度が+10 であるとしよう。これが真であれば+20 の価値が当事者にとってある。ここでその当事者が持っている他の態度的快楽は、偽の態度的苦痛だけであり、その強度は-15 だとしよう。ここで上記の態度的快楽は真であろうか。まずこの態度的快楽が（偽の態度的苦痛のゆえに）真であるとする、+20 の価値が当事者にとってあることになり、態度的苦痛の-15 の価値を差し引いても、全体として当事者の福利は+5 であって、当事者は全体としてみじめでないことになり、したがってこの態度的快楽は偽であることになる。この態度的快楽が偽であるとする、+10 の価値しか当事者にはないことになり、態度的苦痛の価値-15 とあわせると-5 ということになり、当事者は全体としてみじめな状態にあることになり、したがってこの態度的快楽は真であることになる。このため、この態度的快楽が真である（当事者が総合的にみてみじめである）のはそれが偽である（当事者が総合的にみてみじめでない）場合であり、その場合に限る、ということになるように見える。

いわゆる「欲求のパラドックス」に対する解決策は様々である。たとえば、（1）矛盾を生じさせるような心的状態——たとえば、自分が全体としてみじめになることを欲求すること——はありえない、と論じるのは一つの途である。また（1）の路線が上手くいかないとしても、欲求充足説のうち（2）現実の欲求ではなく理想化された欲求の充足や挫折が福利に貢献するという説を採用して、自分がみじめな状態になることはそうした理想化された欲求の対象にならない、と論じる余地もある。また（3）福利に関連する欲求を、自分の利益のためにもたれる欲求に限定する、というような、欲求の内容ないし在り方に制限を課すという方策もあるし、（4）自分が全体としてみじめであることを欲求するというような二階の心的状態は、福利と無関係だと論じることも考えられる。本発表では、これらを含む諸々の解決策の問題点を指摘した上で、当該タイプの心的状態（たとえば、欲求）が事実と合致するかしないかのいずれかである、という前提を放棄するという路線を提示し、その具体案を擁護することにする。

- Bradley, B. 2007. "A Paradox for Some Theories of Welfare." *Philosophical Studies*, 133: pp. 45–53.
- Feldman, F. 2004. *Pleasure and the Good Life: Concerning the Nature, Varieties, and Plausibility of Hedonism*. Oxford: Clarendon Press.
- Heathwood, C. 2016. "Desire-Fulfillment Theory." *The Routledge Handbook of Philosophy of Well-Being*, Routledge, pp. 135-147.
- Skow, B. 2009. "Preferentism and the Paradox of Desire." *Journal of Ethics and Social Philosophy*, 3(3): pp. 1-17.